

センター試験志願者の暦月齢別の対人口構成比率の推移

○内田照久 (大学入試センター)
 山地弘起 (大学入試センター)

橋本貴充 # (大学入試センター)

キーワード：大学入試センター試験，月齢，発達

問題と目的

本研究は、教育測定データの蓄積を、教育制度の改革や、配慮が必要な児童生徒の支援に生かしていくことを目的とする。ここでは、初等・中等教育から高等教育まで連なる「社会的制度としての教育課程」と「生物としての子どもの成長発達」の間の適合性について、大学入試のデータを基に検討する。

方法

厚生労働省の人口動態調査から、平成 2 年度～30 年度のセンター試験の新卒志願者について、学年コーホートごとに、月齢別人口をもとめた。出生月別にみた出生数・乳児死亡数から満 1 歳時点での月齢別人口を集計した。なお、4 月 1 日生まれの者は前年度の学年コーホートに入るため、その補正も行った。

その上で、月齢ごとにセンター試験の志願率をもとめた。試験年度によってセンター試験の志願率は異なるので、各学年コーホートでのセンター試験志願率を基準 (100%) とし、各月齢での志願率との比を算出して示した (Figure 1)。

次に各月齢ごとに、センター試験の英語筆記、数学 IA・IIB、国語について、成績を分析した。実施年度によって難易度が異なるので、標準得点をもとめた。学年コーホートごとに平均を 500、標準偏差を 100 として指標化した (Figure 2)。

結果と考察

Figure 1 から、暦年齢が高い程、センター試験の志願率が高いことがわかる。一方で、センター試験の英語や数学の試験成績は、逆に月齢が低い程、成績が高い (Figure 2)。

その原因の一つとしては、中学受験などの早期選抜の影響が考えられる。暦年長者は成長発達面で先んじているので難関校の合格者が多くなり、その構成比が高校まで維持される可能性が高い。

しかし、暦年少者のポテンシャルは決して低くないはずである。高校段階になると、学力差は発達差でなく、学習の成果として顕在化する。その結果、相対的な人数そのものは少ないが、成長面の不利に抗したポテンシャルの高い暦年少者集団が、暦年長者集団を、学力面で凌駕したと考えることもできよう。今後の検証が不可欠である。

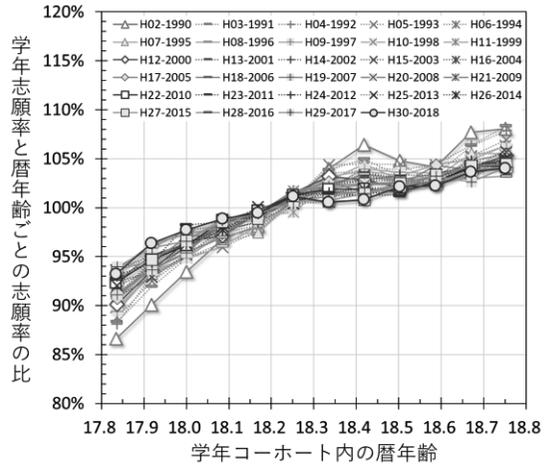


Figure 1 学年コーホート全体のセンター試験の志願率に対する暦月齢ごとの志願率の割合

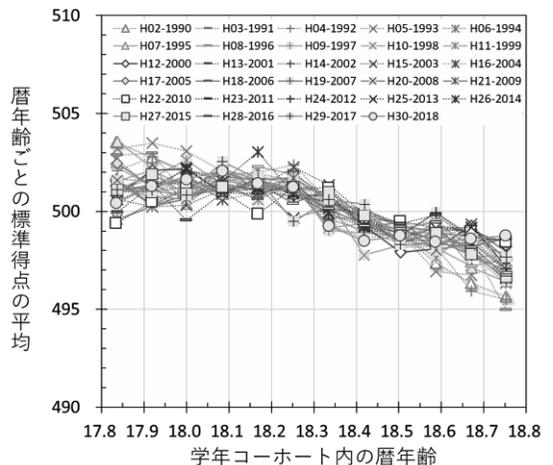


Figure 2 暦月齢ごとのセンター試験の英語成績

引用文献

川口大司・森 啓明 (2007). 誕生日と学業成績・最終学歴 日本労働研究雑誌, No. 569, 29-42.

付記

本研究は、令和元～2 年度大学入試センター理事長裁量経費、及び、JSPS 科学研究費補助金 (JP20K03353, JP19H05491) の助成を受けました。